〔３年　音楽科〕

一人一人の歌唱力を高める学習の工夫

―より豊かな表現ができる合唱を目指して―

１．合唱指導における個別化のねらい

３年生ともなると男子の変声もほぼ落着き，女子も女性らしい声へと変わってゆく。声の変化が，合唱の表現力に大きな影響を与えることは言うまでもない。例えば，合唱コンクールでは１年生がどんなにがんばって大きな声を出しても，３年生の深い響きのある合唱にはかなわない。合唱の良さは，発声の多少良くない生徒や，声の小さい生徒がいたとしても，その声が，全体の響きの中に溶け込んでさえいれば，合唱として十分に成立するし，本人も気持ちよく歌えることにある。一人一人が楽しく歌える授業ができれば，それはそれで十分成功しているといえるわけだが，次の段階として，より表現の豊かな合唱を目指すためには，生徒一人一人の歌唱力を伸ばす。つまり，独唱しても，聴くにたえるだけの歌唱力を個々につけさせることによって，さらに合唱の表現力を豊かにすることができるのではないかと考えて，学習の個別化について，実践研究した。

２．具体的方策と研究経過

(1) 個別化をめざす学習形態

一人一人の歌唱力を伸ばすために，独唱させることを主眼においた。しかし，数少ない授業時間の中では，なかなか改まって発表させる機会がもちにくいので，各学期の歌のテストという学習形態をとり，コンサート形式で発表させることにした。また，合唱練習のときには，一人一人に自分のパートを歌わせて，音程，発声などをチェックするようにした。

(2) 指導の経過

ひとことで独唱させると言っても，実際，改まった形で，いきなり生徒に歌わせようとしても，そのような経験のない生徒にとっては，恥ずかしかったり，緊張したりで，なかなか思うように実力を発揮できないであろうということは十分に考えられた。そこで，１年間にわたる長期的な計画が必要であろうと考え，１学期には重唱を経験させ，その上で２学期に独唱させるという流れの上に，指導計画を立ててみた。１学期の始まりの時期に，生徒に，ほぼ１年間にわたる授業の流れを説明しておくことは大切である。

ア．１学期の歌唱指導

合唱ではなく，重唱となるとそれぞれのパートが，かなりしっかりと自分の音程を覚えておかないとハモらない。そのことをはっきり自覚させて，自分のパートを責任をもって歌わせること。これがまず重唱の基本となる。そこで，そのための教材として，教科書から，「花」をとり上げることにした。

〔実践事例Ⅰ〕

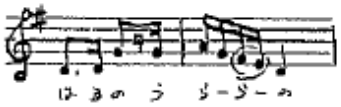
(1) 教材　「花」　武島　羽衣　作詞　　滝　廉太郎　作曲

昔から有名な曲で，国民的歌謡と言ってよい。同声二部合唱なので，誰でも手軽に楽しむことができる。ただし，正確に歌っている例は少ないようである。

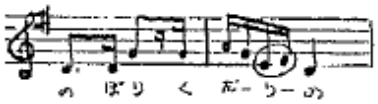
(2) 指導計画

第１時　メロディーを正確に歌えるようにする。特に，譜例２の部分は，譜例１のように歌い易いので注意する。

譜例1.



譜例2.



第２時　アルトのメロディーを正確に歌えるようにする。

第３時　ソプラノとアルトのメロディーを合わせる。合わせ方としては

A　女声ーソプラノ　　男声ーアルト

B　男声ーアルト　　女声ーソプラノ

C　ソプラノ，テナー，ーソプラノ　　アルト，バスーアルト

D　任意に歌いたいパートを歌わせる

など，いろいろの方法があるが，第４時以降は，他の合唱曲が中心になるため，毎時間，これらの組み合わせを適宜，１～２回程歌わせて，忘れないようにしておく。

(3) 発表の方法

1. まず，任意にペアを作らせておく。同時に，どちらがソプラノを歌うか，アルトを歌うかを，自分達で決めさせておく。

2. 方法と評価について示しておく。つまり，

方法ー１番のみ。暗譜で歌う。

評価ーA，大きな声が出ているか。（発声，発音を含む）

B，正確に歌えているか。

C，よくハモっているか。（ソプラノ，アルトのバランスなども）

以上を，きちんと押さえて歌えたかどうかを評価の基準にする。

3. 発表の形態

平常は，図1のような形で授業を行っているが，このような発表をする場合は，図2の形で行っている。教室をいろいろな形で利用できる点からも，合唱や，器楽中心の授業をする場合は，音楽室には，机がない方がよい。

図1

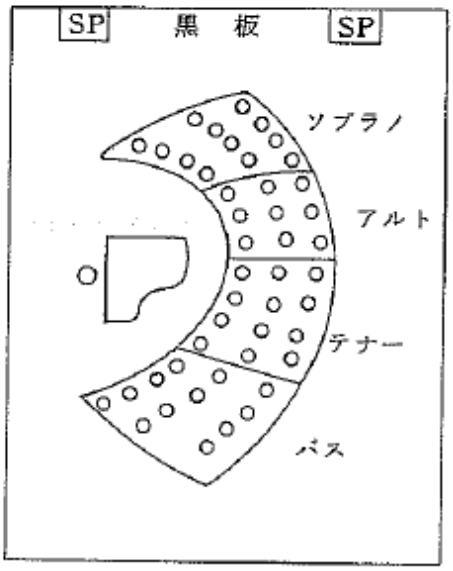
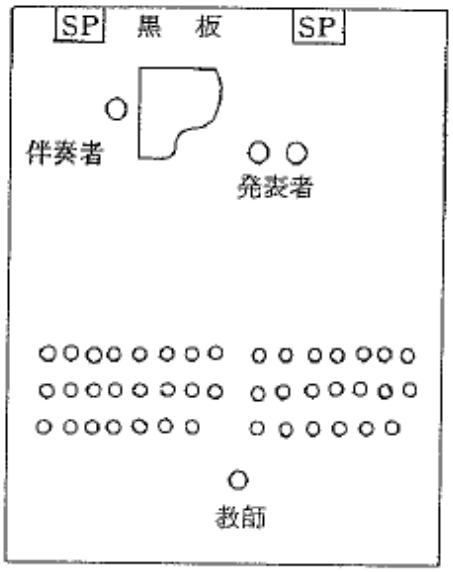


図2



(4) 結果についての考察

1. 教材について

ふだん，混三部，四部の響きに慣れている生徒達にとっては，昔から有名な同声二部合唱でもあり，簡単に歌えるつもりで取り組んだようであるが，聴き覚えで歌う生徒が大部分で，正確に楽譜通りに歌うには意外に苦労した生徒が多かった。しかし，覚えた後は，起承転結もはっきりしており，気持ちよく歌えたようである。やはり名曲はよい。

2. 重唱について

重唱をさせる場合の長所として，教師の立場からは，ひとり1パートなので，一人一人の声質や，力量がよくわかること。生徒にとっては，一人で歌うよりも，心強いということと，合唱の場合にはなかなか経験できない，アンサンブルが経験できることである。

3. 評価について

評価のポイントについては前もって生徒に示しておいたので取り組み易かったよう

であった。発声については，平常の授業の中で折りにふれ個々にも指導してあるが，改めて，声楽的な発声ができているかどうかを最大のポイントにした。声楽的発声ができていれば，当然，それに伴って，声量のコントロール，発音の問題等は，ある程度まで，マスターできていると考えられるからである。

4. 生徒の反応

初めて人前で歌った生徒が大部分であるが，かなり緊張はしていたものの，テストということもあり，全員が精いっぱい歌えたようである。中には緊張の余り，思ったように声が出ず「もう1回歌わせて下さい」と申し出る生徒もいたが「もうやりたくない」ではなく「納得のいくようもう1度やりたい」という前向きの姿勢は，大変好ましかった。また，重唱とは言え，個々の力量は生徒にもわかるわけで「誰々はうまいね」などという会話が，所々きこえてきた。2学期への確信を深めることができた。

イ. 2学期の歌唱指導

1学期の成果をふまえて，所期の目的である独唱にはいることにした。合唱の場合ももちろんであるが，独唱の場合は特に教材の選択が重要になってくる。なぜなら，生徒一人一人の声の質，音域，そして好みが，それぞれ異なるからである。当然，一つの教材では無理があるわけだが，好き勝手に曲を選ばせたのでは，一斉授業の中ではなかなか指導の手がはいりにくい。そこで，音域，曲想などを考えて，選択の幅がもてるように，次の3曲を課題曲とすることにした。

1.「帰れソレントへ」　2.「夢見る人」　3.「追憶」

〔実践事例Ⅱ〕

(1) 教材

ア 「帰れ　ソレントへ」　芙龍　明子　作詞　　クルティス　作曲

曲想の変化が激しく，劇的であり，その気になれば，かなり乗って歌える曲である。音域もCからEsまでであり，伴奏にメロディーがあるので歌い易い。

イ 「夢見る人」　津川　主一　訳詞　　フォスター　作曲

a a′ b a′＋Codaというわかり易い形で書かれており，原詞はEs durであるがC durに下げられており，音域もHからDまでなので音域の低い生徒向きである。しかし伴奏が$^{9}/_{8}$拍子のリズム形だけなので，自分で音をとれる生徒でないと歌いにくい。

ウ 「追憶」　吉関　吉雄　作詞　　スペイン民謡

「夢見る人」と全く同じ構成の典型的な2部形式の曲で，昔から有名であるが，や

はり，伴奏がリズム形だけであり，かつ，最高音がEなので，かなり高音域に自信がないと歌いこなせない。曲想を表現するにも相当な歌唱力が必要である。

(2) 指導計画

1学期と同様，他教材と併用しながら，4～5時間かけて3曲教える。曲想，発音，まとめ方などは，その都度教えていくが，その内容については省略する。

(3) 発表の方法

3年生は週1時間という時間的な制約もあって，全く曲を最初から最後まで一人で歌わせるとどうしても2時間はかかってしまう。他に教えることも多々あるので，次のようにして行うことにした。

1. 先ずそれぞれの曲の特徴を説明した上で，自分の適性と好みによって曲を選ばせた。次に同じ曲を選んだ者同士で，ペアを組ませる。
2. 各曲を4つのフレーズに分け，最初の一人がはじめのフレーズを歌う。次にもう一人が2番目のフレーズを歌う。残り2つのフレーズは二人で歌うようにした。
3. 評価や教室の配置は，基本的には1学期と同じであるが，特に評価については，独唱である点に重点を置き，重唱の時とはちがって，アンサンブルというよりも，個々の歌唱力が問われるものであることを，強調しておく。

(4) 結果についての考察

1. 教材について

3曲3様にむずかしさのある曲であるが，生徒達は，よく考えて自分に適した曲を，選択していた。「帰れ　ソレントへ」は，どちらかというと外向的な生徒が選択したり，「夢路より」は，やはり音域のせいか，歌唱力に自信のない生徒が選択する傾向があったことは，なかなか興味深かった。

2. 独唱について

やはり，1学期に2重唱を経験したことが，大きな自信につながったようである。また，独唱とは言え，隣にもう一人いるという心強さが，生徒の方には十分あったようである。力いっぱい歌い切った自信は，各クラスとも，テストが終わった後で，上手に歌えた者を1～2名，アンコール演奏と称して歌わせた時

にも，うれしそうに，生き生きと歌ったことを見ても，よくわかった。

3. 評価について

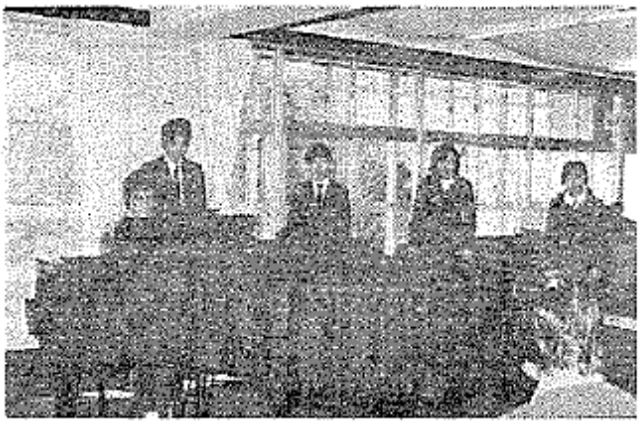
1学期に，2重唱をした際に，個々に指導をしておいた成果が2学期の授業を通じてあらわれて来たようで，どの生徒も，1学期とは比較にならないくらい，進歩していた。4段階で評価したが，ほとんどがB以上。Aは各クラス7～10名ほどもいた。

4. 生徒の反応について

歌う生徒については，前述した点について何回も指導しておいたが，聴く生徒に対しては，コンサートの聴衆としてのマナーを要求した。歌う側の生徒は非常に真剣であるが，それが聴く側にも緊張感をもたらし，生演奏ならではの，すばらしい演奏が数多く生まれた。生徒同士はもちろん，教師にも感動を与えてくれるような演奏にめぐりあえたことは，大変な幸せであった。

3．考察，及び今後の課題

1～2学期を通じて，他人に頼らず，自分の力で歌い切るという経験をした生徒達は，驚くほど自信を持って歌うようになった。もちろん，それ以前にも合唱は皆好きで，元気に歌っていたが，歌っている時に，ふと目が合うと，自信なきそうに下を向いてしまう生徒も何人かはいた。しかし，今，彼らの表情が変わって，生き生きしているのを見ると，それなりの成果は，あったのではないか，と考えたい。また，独唱という事で，授業の一斉指導の中では，独唱の課題曲である3曲は，斉唱させた事が大部分であったが，ユニゾンがそろって来た成果が，合唱の時の各パートの音程，音色を統一することに，非常に役立っている。また，曲想などに関しての細かい指導が，よく行きわたるようになった。人前で一人で歌うというのは今の生徒達にとってなかなか勇気のいることのようだが，日常の授業の中で楽しく歌う雰囲気ができていれば，生徒の中にある，向上心，ライバル意識などが，今回のような経験を経ると，恥かしさを越えて湧き上ってくるようである。今後も，さらに一人一人に自信をつけさせる場を，工夫して作り出し，さらに感動を呼ぶ合唱を作り上げていきたい。



（長岡　節）